

# 広島芸術学会十周年記念「10年の軌跡展」まとめ

実行委員会委員長

入野忠芳（画家）

「10年の軌跡展」は盛況だった。世間の評判もさることながら、なによりも出品者のすべてが次回への強い期待を語り始めたことに意義の大きさを認めることができる。それにしても、多数の美術家会員を擁する学会でありながら、従来の学会活動は学会という名の通念どおりに学問の側への片寄りが強いために、美術家会員が会と交流する機会は少ないばかりか、いつとはなく距離をおいた空気ができていたといってもいい。

学会は研究者、各種の作家、学芸員、愛好者等々によって構成されており、先ずはそれら異分野どうしの交流と研鑽の場として活性化することが会の趣旨と言ってよからうが、組織となれば口でいうほどた易くはなく、はたして作家が学者と同じ場においてなにかを成すことができるのかという懐疑を私自身も抱いていなかったわけではない。今回のような美術家主体の美術展が十年にしてはじめて実現したというのは遅きに失した感も強いが、それがこの会のありようを物語っているのだといえる。さて、展覧会といってもその形はさまざまである。現に実行委員会の出発点においては、大会テーマに沿えるような有能作家を他所の地から

招請して開催してはどうかという案も出たほどだが、しかしながら学会が初めての美術展をやるとうというこの期に及んでそのような仕方を選ぶなら、多くの作家が会にとどまる意欲を失うであろうことは目に見えており、ここをどう選択するかは会の存亡にも関わることであったといつてよからう。このように、結果としての成功は当初から約束されたものではなかった。しかしながら、五月十四日の第一回委員会のあと会報37号で主旨曖昧なまま展覧会企画を発表すると、作家からは次々と期待の声寄せられ始めた。

会員の単なる作品発表回というのだけは避けたかった。やるなら質のいいものでなければならぬ。二十一世紀を切り拓くなどという大見得はきれないまでも、せめて世紀末の今を真摯に証言し得る内容の濃い展覧会でありたいと呼びかけた。さりとて多様な個性の集まりである学会であってみれば、なんらかの共通項でくくることは所詮は無理な話であって、出来るのは個々の作家を問うということだと合意できた。そして、学会十年という歴史を背景にして作家の十年を検証してみるという方法

が生まれてきた。

具体的には、十年前の作品一点と現在の作品一点とを並列して、作家と作品を時間の線の中で見てみようというものだった。出品する作家にとっては、少し勇気のいる企画に違いないけれど反発はなかった。六月には会場も日時も決定して出品希望者の受付を始める時期はいや増した。より高い質の展覧会になるかどうかは出品者の構成いかにかわっていると分かったうえで出品者の自己申告で構成したのは、対等の立場にある会員を選別するのを避けたからであり、且つ又、作家自身の良識を信じたいからでもあった。結果はおおむね順当な顔ぶれであったといえる。そして、だれもが力の入った作品を提出した。

画材店の協力を得たものの、作品の搬入出、展示、会場受付当番などすべて出品者の手で行った。その主体的な参加意識は特筆しておきたい。出品者は平素作家活動を継続している人という条件どおり、それぞれにさまざまな発表活動をしている人たちが一堂にそろって、生きいきと昂揚していた姿は、まさに学会の主旨であるところの異分野の交流そのものであった。その点で今回は、単に展覧会の成功だったというにとどまらず学会の本来の姿を目指す新しい一步となったかもしれない。

あわせて会期中に開催したシンポジウムに触れておきたい。司会もパネリストも作家だけというのは、平成五年九月に広島デザイン会議プログラムの一環として今回同様に私の司会で開催したのに続いて二度目だったが、入場者の数からいえば大盛況とっていいだろう。作家は黙って作品を見せるだけでいいという考えには根強いものがあるし、私自身

もそういうのが本物だという思いを捨てられないでいるが、にもかかわらず、情報過多と、あらゆるものの価値観が多様化し混乱している状況の中で、黙って作品を提出するだけでは足りないという思いも押さえない。今回もそのような思いで成立したし、結果からすれば、出来上がった作品にばかりでなく作家の肉声に興味を示してくれる人が少なくはないのであり、作家はそれに応える努力があつていいのだということを強く感じるこゝとなつた。

とりあえず十周年記念に意味付けた「10年の軌跡展」は成功した。しかし今後はどうつながっていくかは依然として未知である。地域の芸術文化の活性にしっかりとからんだものでありたい。美術に限ることなくさらに他分野との交流も考えてみたい。多勢の展覧会もいし少数選抜の企画も考えられる。今後を樂觀はできないがさまざまな形を考えることはできる。いずれにしても卓抜な企画力と共に、優秀なメンバー構成への努力も必要であろう。そして今後の長期を視野に入れた活動を継続的に検討する場が必要だとして、この冊子が発行される時点においてはすでに新しい委員会が発足しているはずである。

最後に、十周年記念展実行委員を紹介しておきます。大井健地、大橋啓一、高木茂登、田谷行平、出原均、松田弘、吉井章、そして入野でした。すべては実行委員全員の、熱心でしかも楽しい知恵の出し合いから生まれた企画でした。ごくろうさまでした。

※なお、詳細にわたる「顛末記」は別刷りを参照ください。